

岡山県知事賞

たすき
襷

美作市立勝田中学校

一年生 絹田 咲桜

私が住む長谷内地域には、昔から地域の人たちによって、大切にされてきた観音様がまつられている。私の家からは歩いて一時間以上かかる山の高い所にある。私は観音様に守られながら暮らして来たことを祖父からずっと聞かされてきた。

年末、夕食をとりながら祖父が

「明日は、観音様に一年分のお礼を込めて掃除に行こうか。」

と言った。母が、

「みんな休みじゃし、それはええことじゃわ。」

と言った。私は、明日はしっかり手伝いをして観音様をピカピカにしようと思った。

翌朝、軽トラックに竹ぼうきやこまごら、お水やお花、お供

え物などを乗せて出発した。観音様までの道は、ほ装されていないので、ガタガタとした山道で、軽トラック一台分しかない細い道だ。急な坂もあり、一部がけくずれしている所もある。道の途中にはお地藏様や、薬師如来様やくしにょらいさまなどもまつられている。その一つ一つを全部、掃除することになった。特に私が頑張ってきたきれいにしたのは、お地藏様の所だった。そこは、道から少し入った山の中で、お地藏様に続く細い道が、落ち葉で埋めつくされていた。母が、

「お地藏様がおまつりされていることがはっきり分かるように、落ち葉を掃いて道をきれいにしよう。咲桜ちゃん手伝って。」
と言って私に竹ぼうきを渡してきた。道をきれいにすることで、このお地藏様のことを知らなかった人もお参りしてもらえたらうれしいので、私はすぐに返事をしてぼうきで掃いた。落ち葉が多かったので、掃いても掃いてもなかなか終わらなかった。疲れたなと思って周りを見ると、弟が無数に伸びた細い竹を根元からはさみで切っていた。なかなか切れそうにないのに、力を込めて切っていた。私も頑張ろうと思って続きを掃いた。お地藏様の所まで掃き終わって後ろをふり向いてみたら、私が掃除していた所だけがはつきりと道となって浮かび上がって見え

た。祖父が、

「ようしてくれた。咲桜ちゃんありがとう。お地藏様も喜ばれ
とるわ。」

と言ってくれた。私は何かとてもいいことをしたような気持ち
になって、うれしかった。山を登っていく軽トラの後ろで冷た
い空気がとても気持ちよかった。

観音様に着くと、私と弟は、軽トラックから飛び降り、走っ
てお堂まで行った。父が、ゆっくり扉を開けると、お花もない、
お供え物もない、さびしそうな観音様が見えた。観音様は、一
メートルぐらいの高さで、石で彫られている。私は久々にここ
に来たので、なつかしい気持ちになった。父が、

「それじゃあ、みんな手分けして始めよう。」

と言ったので、それぞれがいろいろな場所に分かれた。祖父は
せん定、父はお堂のふき掃除、弟と私は掃き掃除をした。すみ
からすみまでゴミが残らないように気をつけて掃いた。掃除が
だいぶすんだ頃、祖父が、

「昔は、元日に日の出祭りをして、部落のみんなで甘酒を飲ん
だり、にぎやかにしたもんじゃ。今じゃ高齢化がすすんでお参
りに来る人も少のうなった。」

と残念そうに話した。このままこの観音様がみんなから忘れら
れていくのだろうか。そう思うと、私はとてもさみしい気持ち
になった。

母は、何も言わず、お供えしたお花を整え、持って来た物を
お供えしていた。そして、

「大丈夫、この子らがおるけん。」

と一言言った。

私は、それを聞いて、何か大切なことを託された気持ちに
なった。祖父は、

「そうじゃなあ。咲桜ちゃん、壮馬君、観音様を大切にしてく
れえよ。」

とにっこりして言った。

掃除が終わると、家族みんなでたたみの上に座って一年間を
無事に過ごせたことに感謝し、お経を唱えた。私は、その間
ずっと母が言ったことの意味を考えていた。自分の生まれ育っ
た地域の財産を守り。受け継いでいくことはどうということなの
か。自分が地域の役に立つにはどうしたらいいのか。私にでき
ることは何なのか。

お堂を閉めて帰ろうとしたとき、父が、観音様の周りに植え

てある桜を見て、

「咲桜ちゃん。春になったらきれいな桜が咲くで。またお参りに来ような。」

と言った。私は春になるのが楽しみになった。次来るときも、精一杯掃除をしようと思った。